

第八章 紫の上の物語 死と蘇生

[第一段 紫の上、絶命す]

大殿の君は(源氏大殿は)、まれまれ渡りたまひて(稀な事に久しぶりで六条院にお戻りになっていて)、えふとも立ち帰りたまはず(宮の手前とても直ぐには二条院に立ち帰る事が出来なさらずに)、静心なく思さるるに(紫の上の容体が気になって、落ち着かなく思えていらしたが)、

「絶え入りたまひぬ(お亡くなりになりました)」

とて、人参りたれば(と申して使者が参上したので)、さらに何事も思し分かれず(全く何もお考えなさる事がお出来になれず)、御心も暮れて渡りたまふ(暗い気分でお帰りなさいます)。

道のほどの心もとなきに(その帰途の間も心此処に在らずだったが)、げにかの院は(実際に二条院は)、ほとりの大路まで人立ち騒ぎたり(外の大路まで人が出て騒然としていました)。殿のうち泣きののしるけはひ(邸内の泣き叫ぶ様子は)、いとまがまがし(とても鎮痛です)。我にもあらで入りたまへれば(殿は我も忘れてお入りなさると)、

「日ごろは(この数日は)、いささか隙見えたまへるを(いくらか穏やかにお見えでしたが)、にはかになむ(急なことで)、かくおはします(こうおなりです)」

とて(と申して)、さぶらふ限りは(控える女房たちが皆)、我も後れたてまつらじと(自分も後れ申し上げることはしまいと)、惑ふさまども(身の振り方に迷う混乱振りの数々で)、限りなし(収拾が着きません)。

御修法どもの檀こぼち(御祈祷壇を解体して)、僧なども、さるべき限りこそ*まかでね(僧たちも主だった者だけは残っているが)、ほろほろと騒ぐを見たまふに(ちらほらと帰り支度に慌しいのを御覧なさると)、「さらば限りにこそは(やはり寿命だったのか)」と思し果つるあさましさに(と殿も諦めなさる事の次第の意外に早い展開のあつ気なさに)、何事かはたぐひあらむ(例えるものなどありません)。*「まかでね」の「ね」は打消しの助動詞「ず」の已然形の逆説用法、と注にも説明がある。「ねど」くらいの言い方。ところで、助動詞「ぬ」には用言の未然形に繋がる<打消語>と連用形に繋がる<完了語>とがある。英語でも「n」は否定と完了の意で多用されるような気がする。「N」音は鼻音で、母長音や摩擦子音や破裂子音などとは異質の音感があり、節や語の中間音としては変化が付いて印象的だが、文末や語尾では減衰音なので聞き取り難い。で、その減衰感が勢いの打消しや過去の遠い距離感を思わせるのだろう。しかし、打消しは論旨の結論を左右するので末尾の聞き取り難さは致命的だ。そこで、念押し「S」音を付け加えずには居られなかった、という仮説が立つらしい、ような補説が古語辞典にある。で、「ns」が「z(ず)」となった、みたいな。いや、少し前の「未然形」についてのノートと、この「ぬ」についてのノートは、ずっと前から気になっていたことだが、是と言う新展開も立たないまま、だから書きようもなく過ぎて来たのだが、せめて気になっていることだけでも書いてみた。気になると言えば、打消語の「ない」の表記も事物の存在否定が「無い」の漢字表記で、論理否定が「ない」の仮名表記、というのが大筋のようだが、論理表記でも体言には「無い」の方が分かり易く見える時もある、いつも表記に迷う。いや、他にも紛らわしいことや整理不足の常用語や用法などを言い出せば限り無いが、解決できない問題も気になった時に気になった事を何処かに書いて置くと荷が少し軽くなる。

「さりとも(しかしこれは)、もののけのするにこそあらめ(もののけの仕業に違いない)。いと(そんなに)、かくひたぶるにな騒ぎそ(こうむやみに泣き騒ぐな)」

と鎮めたまひて(と殿は場を鎮めなさって)、いよいよいみじき願どもを立て添へさせたまふ(いよいよ以て本復ではなく延命の切実な願文の数々を立て加えさせなさいます)。すぐれたる験者どもの限り召し集めて(修行を修めた靈験あらたかな僧侶のすべてを呼び集めなさって)、

「限りある御命にて(限りある御命なので)、この世尽きたまひぬとも(この世を離れなさったとしても)、ただ、今しばしのどめたまへ(ただもう少しだけ止まってください)。*不動尊の御本の誓ひあり(御不動様の念仏を唱えますので)。その日数をだに(其処に示された六ヶ月だけでも)、かけ止めたてまつりたまへ(上をこの世に引き留め差し上げて下さい)」 *「不動尊の御本の誓ひ」は注に<『河海抄』は『大般若経』の「定業亦能転」の『不動義軌』を引いて「又正報尽者、能延六月住」を注す。「その日数」とは六ヶ月をさす。>とある。そういう経典を真心込めて読経するから、どうか延命を叶えてくれ、という念仏だろうか。

と(と修験者たちは)、頭よりまことに黒煙を立てて(頭から本当に黒煙を立てて)、いみじき心を起こして加持したてまつる(全身全霊を傾けて加持申し上げます)。院も(殿御自身も)、

「ただ、今一度目を見合はせたまへ(ただもう一度目を開けて下さい)。いとあへなく限りなりつらむほどをだに(本当に早く逝ってしまったものだから)、え見ずなりにけることの(最期を見届けられなかったのが)、悔しく悲しきを(悔しくて悲しいので)」

と思し惑へるさま(と思ひ狼狽なさる様子が)、止まりたまふべきにもあらぬを(生き永らえなさることが出来なさそうなのを)、見たてまつる心地ども(側で押し申し上げる女房たちの悲しい気持のほどは)、ただ推し量るべし(それはもう推し量られます)。

いみじき御心のうちを(切実な殿の御心痛を)、仏も見たてまつりたまふにや(仏もお分かり申し上げなされたのか)、月ごろさらに現はれ出で来ぬもののけ(この数ヶ月と全く姿を表わさなかった物の怪が)、小さき童女に移りて、呼ばひののしるほどに(小さい童女に乗り移って法師の念力を罵って悪態をつく内に)、やうやう生き出でたまふに(紫の上が漸く生き返りなされたので)、うれしくもゆゆしくも思し騒がる(殿は嬉しくも恐れ多くも胸騒ぎなさいます)。

[第二段 六条御息所の死霊出現]

*いみじく調ぜられて(もののけは僧侶たちの法力に厳しく押さえ込まれて)、 *主語は<もののけ>らしい。が、何にまた誰に「調ぜられて」いるのかも、分かり難い。まあ絵としては、数人の僧侶に童女が押さえ込まれている、と見て置く。というのも、下に「人は皆去りね」とあるからだ。「調ず(てうず)」は<整える>という語意らしく、事物をを<揃える→制する→征する→おとなしくさせる>ような語感。

「人は皆去りね(他の者は皆去りなさい)。院一所の御耳に聞こえむ(院お一人のお耳に申したい)。 *此処で童女を取り押さえていた僧侶たちは離れた、少なくとも物の怪の話が直接聞こえたのは殿だけになった、と見たい。だから、次の言葉には少し間がある。

おのれを月ごろ調じわびさせたまふが(私をこの数ヶ月念じ込めて苦しめなされたのが)、*情けなくつらければ(惨めで悲しいので)、*同じくは思し知らせむと思ひつれど(不覚にも上に憑依してしまった以上は、いっその人を絶命させてあなたに私の悲しみを思い知らせ申したいと思いましたが)、さすがに命も堪ふまじく(そうは言っても肝心の殿自身が命も持ち堪えられないほど)、身を砕きて思し惑ふを見たてまつれば(身を粉にして看病し上の容体を案じなされている姿を押し奉れば)、*今こそ、かくいみじき身を受けたれ(今でこそこのようなあさましい姿に変わっているが)、いにしへの心の残りてこそ(昔のあなたへの執着が残っていればこそ)、かくまでも参り来たるなれば(こうして此処に参上したのだから)、ものの心苦しさをえ見過ぐさで(とてもそのいたわしさを見過ごせず)、つひに現はれぬること(とうとう姿を曝しました)。さらに知られじと思ひつるものを(決して知られまいと思っていたのに) *「なさけなし」はく思い遣りがない、薄情だ、嘆かわしい、無粋だ>などと古語辞典にある。が、あえて現代語の「情けない」の語感を考えてみると、確かにく惨めだ>という思いもあるが、むしろ<期待外れの結果に落胆する>とかく自分の不甲斐無さが嘆かわしい=不本意な結果が残念だ>という、背景が割とはっきり認識されている語用に見える。なので、此処で改めて物の怪が紫の上に取り付いた「本意」なり「意図」なりを考えてみたい。と言っても、それらは前以ては語られていないので、不本意ながら先読みの後付けにならざるを得ない。すると下に、六条御息所の死霊の言葉として「中宮の御事にても、いとうれしくかたじけなしとなむ」と意外にも感謝の辞が語られる。で、是は当該注釈にあるように六章四段の殿が紫の上に過去の女たちを回想して語る場面で、「中宮の御母御息所なむ、さま異に心深くなまめかしき例には、まづ思ひ出でらるれど、人見えにくく、苦しかりしさまになむありし。怨むべきふしぞ、げにことわりとおぼゆるふしを、やがて長く思ひつめて、深く怨ぜられしこそ、いと苦しかりしか。心ゆるびなく恥づかしくて、我も人もうちたゆみ、朝夕の睦びを交はさむには、いとつつましきところのありしかば、うちとけては見落とさることやなど、あまりつころひしほどに、やがて隔たりし仲ぞかし。いとあるまじき名を立ちて、身のあはあはしくなりぬる嘆きを、いみじく思ひしめたまへりしがいとほしく、げに人がらを思ひしも、我罪ある心地して止みにし慰めに、中宮をかくさるべき御契りとはいひながら、取りたてて、世のそしり、人の恨みをも知らず、心寄せたてまつるを、かの世ながらも見直されぬらむ。」と話した事に応えた言い方になっている。殿が上に是を話した意図は、葵の上との結婚生活中も王家筋の女との付き合いには苦勞をしていて、今の姫宮とあなたとの確執が分からないではないので、そのことには私も留意しています、と手前勝手な弁明で紫の上を慰めた心算だった。ものだが、その身勝手さが死霊の恨みを買うという正に裏目に出た次第、らしい。で、御息所死霊は源氏殿の発言に呼応して、娘を中宮に祭り上げて下されたことには感謝するが、自分の執着は「我罪ある心地して止みにし」と源氏殿に結婚を見限られた事があったと続く。まして、生き霊として葵の上に取り付いた執念がおどましく、「深く怨ぜられしこそ、いと苦しかりしか」と疎んじて、殿が御息所の欠点を紫の上に話し聞かせた事が、御息所死霊にとっては死者に鞭打つように辛かったので、そういう悪口を「はぶき隠したまへとこそ思へ、とうち思ひしばかりに、かくいみじき身のけはひなれば、かく所狭きなり。」と明かされる。つまり、死霊の意図は紫の上に取り付くことではなしに、源氏殿の悪口を止めたい、ということだけだったのだが、物の怪のあさましさで、発言者の口を封じる代わりに聞き手の耳を塞ぐという不首尾を見た、ということらしい。そのことについても、「この人を、深く憎しと思ひきこゆることはなけれど、守り強く、いと御あたり遠き心地して、え近づき参らず。」とあって、紫の上はとんだトバッチリを受けた格好だ。ただ、上自身は姫宮の輿入れ当初から出家願望が果たせず気病んではいたのだろう。ともあれ、「なさけなし」は直接にはこの数ヶ月の念仏に封力された死霊の苦しみだろうが、それというのも意に反して上に取り付く形となってしまった自分の不甲斐無さに対しての無念さから、という思い、と読んで置きたい。というのも、このように読んで置かないと、次の「同じくは」の意味が取れないからだ。 *「同じくは思し知らせむ」について、注にはく源氏に。「思し知らせむ」という敬語表現。>とある。さて、「同じくは」はくどうせなら、いっそのこと>だが、

何が基準なのか分からないので唐突な言い方だ。が、前項の「なさけなし」のノートで、死霊にとっては、紫の上への憑依自体が失態であること、少なくとも本意ではなかったこと、が知れた。つまり、「同じくは」はくどうせ不本意ながら上に取り付いてしまったのならだ。で、「思し知らせむ」は元々の死霊の意図が源氏殿への反発なので、死霊が「情けなくつらければ」いっそ殿にも悲しみを味合わせるべく「紫の上を絶命させる」という恐ろしい文意となる。ただ、物の怪の恐ろしさは、此处では一応の作者の筋立てで尤もらしく因果が語られていて、その限りでは恐ろしさが増すような演出だが、一方ではこの筋立てでは紫の上が主体の無い物扱いされてもいるワケだし、霊験なるものは本来はそのような限りなどなく、此处で霊体が斯う考えたから、などという知れた筋ではなく、訳の分からない異次元の力がヒトの生死に作用する、という霊体の認識自体にある。およそ、ヒトが解明できていない作用機構やその機構原理などは数限りないだろうし、宇宙の存在意義などがあるのかどうか、あったとしてもそれがヒトに分かるのかどうか、不老不死に意味があるのか、まるで遠い世界だが、分からない事をまとめて霊体と考えてしまうと、どうも損をする、というのが経験則だと、今の多くのヒトは私を含めて思っている、のだろう。 *「今こそ、かくいみじき身を受けたれ」は注に「成仏できずに魔界にさまよっていることをいう。」とある。この注は「いみじき身」という死霊自身の事情説明だ。それはそれで参考になるが、だとすると、この「今こそ」を受けた「受けたれ」の已然形の構文意は「れど」の逆接で下に繋がるものようで、だとすると、「今こそ」の「こそ」は無念の強意の「今」となっては「>であり、快心の「この機に乗じて」>では無い、と分かるワケだ。意外な難関だ。

とて(と言って童女が)、髪を*振りかけて泣くけはひ(髪で顔を覆って泣く姿は)、ただ*昔見たまひしもののけのさまと見えたり(ちょうど昔御覧になった物の怪のように見えました)。 *「振りかく」は「振り掛ける」。「髪を振りかく」は「髪で顔を覆う」。童女の恐ろしい形相は映画「エクソシスト」にも採用されていた演出。普通に考えれば病苦の惨状が思い遣られるが、怨霊や悪霊に説得力がある事態や事情も現に在るのだろう。 *「昔見たまひしもののけのさま」は注に「『葵』巻の六条御息所の生霊出現をさす。」とある。

あさましく(おぞましく)、むくつけしと(気味が悪い事と)、思ししみにしことの変はらぬもゆゆしければ(深く嫌気を覚えた御息所の執念が今も変わらず霊在しているというのも穏やかならぬことなので、殿は宥めて事を収めようとなさり)、このわらはの手をとらへて(その童女の手を取って)、引き据ゑて(前にきちんと座らせて)、さま悪しくもせさせたまはず(行儀良くさせなさいます)。

「まことにその人か(本当に本人なのか)。よからぬ狐などいふなるものの(性悪のキツネなどというものの)、たぶれたるが(化けたものが)、亡き人の面伏なること言ひ出づるもあなるを(故人の面目を潰すようなことを言い出すこともあるようだから)、たしかなる名のりせよ(はっきりと名を名乗れ)。また人の知らざらむことの(そして他人が知らぬ筈の)、心にしるく思ひ出でられぬべからむを言へ(心に深く思い出されるに違いない事を言え)。さてなむ、いささかにても信ずべき(そうすれば少しは信じられる)」

とのたまへば(と仰ると)、ほろほろといたく泣きて(物の怪はぼろぼろと大泣きして)、

「わが身こそあらぬさまなれそれながら、そらおぼれする君は君なり (和歌 35-12)

「この身は斯くも成れの果て、なれは変わらぬ薄情け (意識 35-12)

*是は和歌なのだろうか。私にはどうも、御座敷の遊び歌の風情の語感で、少なくとも深刻な場面の切実な歌、とは思えない。そも、私如きには読めていないのかも知れないが、キツネ化かしの題目で大喜利の洒落詠みと見れば、「わが身こそあらぬさまなれ(この身は望ましくない姿だ)」の係り結びが順接にも逆接にも読める、という面白さが有るのは分かる。「それながら」も<それだから>と<それなのに>に読める。「そらおぼれ」は<空惚け>と古語辞典にある。が、是を「空(掴み所がない)」という接頭語が付いた「溺る(正体を失う、呆然とする)」の連用名詞と取れば複意に読める。即ち、一意は<私は変わり果てた姿だが、あなたは相変わらず知らん顔をして冷たい>で、もう一意は<私が変わり果てた姿なので、変わらないあなたは気付かない>だ。

*いとつらし、いとつらし *注に<死霊の詞。『完訳』は「「つらし」は相手を恨む意。現身の御息所にはなかった発想。情念のむき出しになった物の怪のゆえんか」と注す。>とある。であれば、「いとつらし」は与謝野訳文にあるように<何と恨めしい>と言っているのかも知れないが、「いとつらし」の語感自体は<とても哀しい>という可愛い言い方に、私には聞こえる。こういう言い方を在りし日の御息所がしていれば、光君は思わず抱きしめただろうに、とか思うほどだ。それと、「いとつらし」を二回重ねたのは、歌が複意の洒落になっているという明示、にさえ見える。であれば、この添え句も冗句だ。紫の上の死に目に、それも怨霊騒ぎにもなっているというのに、軽々しい語り口は無さそうにも思うが、御息所の怨み辛みに私は然して説得力を感じない。むしろこの軽さに、臨終でも重くならない紫の上の人柄が懐かしく可愛く思えるほどだ。怨霊さえ手懐ける紫の上の純真さを作者は表現しているのかも知れない、とは思いつい過ぎか。

と泣き叫ぶものから(と泣き叫ぶものではありながら)、さすがにもの恥ぢしたるけはひ(それでも殿を男と意識して恥じ入っている様子が)、変らず(相変わらずの執着ぶり)、なかなかいと疎ましく(厄介で至って邪魔臭く)、心憂ければ(気が重いので)、もの言はせじと思す(物の怪にこれ以上語らせたくないと殿はお思いになります)。

「中宮の御事にても(中宮の立後に御骨折り頂いた事にしても)、いとうれしくかたじけなしとなむ(とても喜ばしく有難いものと)、*天翔りても見たてまつれど(靈魂ながらも思い申し上げますが)、道異になりぬれば(異界の道を進む事になったので)、子の上までも深く*おぼえぬにやあらむ(独立した子供の身の上までは深く気にならないものようです)、なほ(今でも)、みづからつらしと思ひきこえし*心の執なむ(自分自身が恨めしいと思ひ申したあなたへの執着心というものが)、止まるものなりける(残っているものなのです)。 *「天翔り(あまがけり)」は、ラ行四段活用動詞の「天翔る(神や霊が空を走り飛ぶ)」の連用名詞で<空を飛ぶこと>でもあるが、逆に「空を飛ぶこと」という言い方は、そういう存在である<靈魂>を示す名詞にもなりそうだ。「ても」は、条件提示の接続助詞「て」と強意の係助詞「も」が付いたもので、「天翔りても」は<靈魂となっても、靈魂であっても>くらいの言い方。 *「おぼえぬにやあらむ」は自分の事を他人事のように言う不自然な言い方に見える。これは物の怪の異様さを表わす言い方なのかも知れないが、私には作者が物の怪の正体を源氏殿の妄想と見据えていて、殿にとっては物の怪は他人事だ、他人事と思いたい、という心理までも表現しようとした語り口にさせ見える。是はさすがに我ながら強引だが、何か含みを感じる。 *「心の執(こころのしふ)」は<自分の執着心>。なので、「自ら辛しと思ひ聞こえし」を直接受けるには、謙讓語の「聞こゆ」が変だ。で、「聞こえし」の「し(過去の助動詞「き」の連体形)」が示すものは<話し相手の源氏殿>なので、与謝野訳文の<あなた(への)>の明示に従う。ただ、現代語でも話し言葉では、特に日本語ではかも知れないが、話し相手の<あなたに対しての>という言い方は省略、という敬語使いで示されることが多いような気がする。一般に、客観表現は記録の確度を増すが、同一の場を共有する者同士の会話に於いては、互いの関係性を意識した敬語や謙讓語や使役語で話す事が相手の存在を認めることになり、事態の認識を共有する一体感が得

られる。ただ、混み入った話では言葉遣いで関係性を示すのは分かり難いので、初めに協議参加者同士の立場を確認しあって、後は客観表現で議論を深めるというのが会議の進行方法ではあるようだ。で、その初めの立場確認というのが「挨拶」であって、挨拶の仕方の重要さが再確認される所だ。

その中にも(その恨みの中でも)、生きての世に、*人より落として思し捨てしよりも(生きていた時に葵の上より下に見てお見捨てなされたことよりも)、*思ふどちの御物語のついでに(女楽の後の御夫婦の語らいの際に)、*心善からず憎かりしありさまをのたまひ出でたりしなむ(性格が素直でなく世話が焼けたとわたしの事を言い付けなされた事が)、いと恨めしく(本当に情けなく)。今はただ亡きに思し許して(今はもう死んでいるのだからと昔の私の生霊の世迷い事もお許し下さって)、異人の言ひ落としめむをだに(他の人の悪口でさえ)、*はぶき隠したまへとこそ思へ(否定して庇って頂きたいとのように思えば)、*とうち思ひしばかりに(そう思った途端に)、かく*いみじき身のけはひなれば(わたしがこうした怨念の化身なので)、かく*所狭きなり(このような騒ぎとなったのです)。 *「人より落として」は注に<正妻の葵の上より低く扱われたことをいう。>とある。車争いの件が尾を引いているのだろう、恐らくは源氏殿の深層心理での危惧として。 *「思ふどちの御物語」は注に<女楽の後に源氏が紫の上に六条御息所のことを語ったことをさす。>とある。是も補語して明示したほうが分かりやすい。 *「心善からず憎かりしありさま」は六章四段の源氏殿の弁にあった「心ゆるびなく恥づかしくて、我も人もうちたゆみ、朝夕の睦びを交はさむには、いとつつましきところのありしかば、うちとけては見落とさることやなど、あまりつくろひしほどに、やがて隔たりし仲ぞかし」あたりのことを言っているのだろう。源氏殿は御息所を「さま異に心深くなまめかしき」と王家の品格と優雅さを備えた格別の人とは認めるものの、それだけに格式と身分を守る生き方に執念深く、情に流される緩みが無いので息詰まる人だった、と結論付けていた。が、客観的には御息所が大事にした物こそが王家の誇りであって、自分の考えの方が自分の欲望を満たすのに都合の良いだけの身勝手な判断だということに、殿自身も気付いていた、という立ち位置で作者は書いているように思う。ただ作者は、その殿が<自分の欲望を満たす>事自体も、それこそが世の実相であり、決して無価値なものだったり、排除すべきものなどとは考えず、むしろその男の情熱が世界を切り開く原動力だと認識しているようにも見える。その重層的で深い価値観がこの話に厚みを与えているのだろう。 *「はぶき隠す」は「省く(はぶく、取り除く)」の連用形に「隠す(目立たなくする)」が付いたもので<否定してかばう>という言い方らしい。「たまへ」は命令形で<して下さい、して頂きたい>。「こそ思へ」の係り結びは「思へば」の順接で「かくいみじき身のけはひなれば」に繋がるようだ。 *「とうち思ひしばかりに」は補説の挿入句。切迫感を出す語り口なのだろうか。係り結びの文型に挟まれて、且つ、その展開項を「と」の格助詞で受ける間に合わせの言い方が珍しく、分かり難い面もあるが新しさも感じる。 *「いみじき身のけはひ」は「いみじき身の・けはひ」なのか、「いみじき・身のけはひ」なのか。「いみじ」は<程度の甚大さを言う形容詞>と古語辞典にあり、物凄く<～だ>という言い方になるようだが、その肝心の「～」の中身に付いては<限定される語を省略し、意味内容を文脈で補う>と補説されていて、場合によって<あさましい限りの、惨めな限りの、非常に優れた、実に情けない>などの意になるようで、それがはっきりしないからこうして理解に苦しんでいるのだが、とりあえず発言者の気持ちの強さだけは汲んで置くべき語らしい。「身」は<身体>という個体の存在であり<身分、身の上>を説明する語でもあり、会話では<わたし>のことでもある。だから、「身の」という言い方は<身の上が、存在事情が>とも<私が>とも取れる。そして最も厄介なのが「けはひ」という語だ。「け」は<気・怪・異・化>などとさまざまに表記されるが、事物や気持の趨勢とか傾向とか性質とか状態とかを言う語なのだろう。「はひ」は「延ぶ(はふ、力の及ぶ範囲が広がる)」の連用名詞で<作用している状態=在る事>と見て置く。で、「かく・いみじき身の・けはひなれば」は<このように執念に凝り固まった私の霊気なので>とかくこのようなおぞましいこの身の邪気なので>などと読める。また、「かく・いみじき・身のけはひ・なれば」は

<わたしがこのように見境のない化け物なので>とか<わたしがこのような怨念の化身なので>などと読める。尤も、物の怪本人の弁としては自分を<化け物>とは言わなそうだが、それも化け物のことなので分からない。ともあれ恐らくは、是がそれらの意味を複合的に漂わせた書き方だとしても、「身のけはひ」という言い方で<化け物・化身>を感じたのが当時の人の生活感だった、ように私は思う。でなければ、この書き方は、こうして見たように余りにも面倒臭過ぎる。 *「所狭し(ところせし)」は<窮屈だ。気詰まりだ。>と古語辞典にある。「所狭き」は連体形なので<気詰まりなこと、気詰まりな次第>くらい、または<行き詰った次第>あたりの言い方だろうか。しかし、どうにも舌足らずの言い方に見えて分かり難い。注には<『集成』は「こんな大変なことになったのです」「魔界に身を墮した悪霊なので、ほんのちょっとした心のゆらぎでも、紫の上の大病の原因になった、と言う」と注す。>とある。この注は全体の文意の説明としては参考になるが、「所狭き」を<大変なことになった>と言い換えられるのだろうか。こんなに掴み難い語感の語用も珍しく、文意を考えても収まりの良い補語も思い付かない。ただ、「所狭し」は<盛大で騒がしい>とか<人だかりで混雑している>という語用もあるようなので、余り読み込み過ぎないことも大事かと、いっそ「所狭きなり」を<騒ぎとなった>という言い方の成句と見做すことにする。

この人を(この奥方を)、深く憎しと思ひきこゆることはなけれど(深く憎いと思ひ申すことは無いが)、*守り強く(あなたの神仏の加護が強くて)、いと*御あたり遠き心地して(周りの結界に遠ざけられて)、*え近づき参らず(とても近づいて悪口をお止め申せないで、代わりに聞き手のこの人に宿りました)。 *「守り強く」は注に<源氏をさす。源氏の神仏の加護が厚く物の怪として近寄りたいたいことをいう。>とある。 *「御あたり遠し」は<あなたの周りの結界に遠ざけられる>と読んで置く。 *「え近づき参らず」は殿に対する述辞だが、是は「思ひきこゆることはなけれど」を受けた構文なので、「この人」に対する<代へて宿りぬ>などの述辞が下に省かれている、と読んで置く。

*御声をだにほのかになむ聞きはべる*よし(それでも、あなたのお声だけでも少しはお聞き致す事が出来たので)、今は(後はもう)、この罪軽むばかりのわざをせさせたまへ(この怨霊の罪を軽くさせるような法術を上げさせ為されれば良いのでしょうか)。修法(しゅほふ、護摩を焚いて)、読経とののしることも(念仏を唱えるのも)、身には苦しくわびしき炎とのみまつはれて(わたしには押さえ付けられて靈力を削がれる苦しくて情けない火あぶりの仕打ちにしかならず)、さらに尊きことも聞こえねば(一向に尊い教えも耳に入らないので)、いと悲しくなむ(本当に哀しいものです)。 *「御声をだに」の校訂に疑問あり。写本画像サイトで確認すると、当該箇所は東京国立博物館本(94/151)では「ちかつきまいらせ以御こゑを×にほのかになむきゝはへる よし いまは」、京都大学本(pp. 165-166)では「ちかつきまいら×御こゑを×にほのかになんきゝ侍よしいまは」、とあるように見えるが×以外の字も特にこの部分では読み難く思える。で、結局またも分からないのだが、だからと言って、渋谷校訂の<え近づき参らず、御声をだにほのかになむ聞きはべる。よし、今は、>が絶対で、此処を<え近づき参らず。御声をだにほのかになむ聞きはべるよし、今は、>とは読めない、とも既定できないように思う。なので、左様に勝手に変えて読むことにする。 *「よし」は形容詞終止形。下に理由を示す接続助詞の「にて」が省かれていて、「よしにて」で<良かったので=出来たので>という言い方、と読んでみる。

中宮にも、この*よしを伝へ聞こえたまへ(中宮にもこの顛末を伝へ聞かせてください)。ゆめ御宮仕へのほどに(決して後宮生活に於いて)、人ときしろひ嫉む心つかひたまふな(他の妃たちと院の寵愛を競って嫉妬したり為さいませんように)。*斎宮におはしまししころほひの御罪軽むべからむ功德のことを(斎宮でいらした時の魔力に近付いた罪を軽く出来るような功德を積む仏道修行を)、かならずせさせたまへ(必ず為さいますように)。いと悔しきことに*なむありける(と

でも悔やまれることなのでしたから)」 *「よし」は<事情、理由>という名詞。此处では<経緯、顛末>ということかと思うが、意図としては<理屈、道理>あたりになるのだろう。以下にも語られるが、神通力は手段を選ばず目的を果たす荒技で、仏道は慈悲の包容力と考えられていたようで、その上で、人の幸せは他者に認められる安らぎの中にある、と御息所は思っているらしく、地位に対する自負も責任もあって当然だが、何ごとも拘り過ぎず、いつも許しを乞う謙虚さを忘れるな、と娘に教えたがっているようだ。なぜなら、自分は激情に身を任せて怨霊に成り果てて、慈悲の教えへを受け付けない哀れな身の上になってしまったから、ということらしい。 *「齋宮におはしまししころほひの御罪」については、注に<齋宮となって仏道から離れた生活をしていたことを悔やまれることだ、という。当時の仏教思想の篤さを暗示する。>とある。この神道と仏道についての考え方は、十八年前の朱雀帝から冷泉帝への御世代わりに伴って齋宮を辞した中宮が御息所と共に伊勢から帰京して、間もなく御息所が体調を崩して「にはかに重くわづらひたまひて、もののいと心細く思されければ、罪深き所ほとりに年経つるも、いみじう思して、尼になりたまひぬ。」(濤標卷五章一段)という語りにも示されていて、当時も私は少なからず意外だった。当時のノートでも理解に苦しんでいる。何しろ、王家の家業は神官の筈だ。だから、娘が齋宮に任ぜられたのだろう。神道を罪というのは自己否定ではないのか。また、御息所は血筋ゆえに霊力が強くて霊体となり、それが為に仏道の救いが得られない、というのも、私には理解できない。異次元の力を信じるなら、霊が悪で修行が善なのではなく、執念も教義も使い方次第で悪にも善にもなる、ように考えるべきではないのか。いや、この方面に深入りする心算は無いが、過ぎたるは及ばざるが如しで、執着もほどほどに、というのは分かる気もするが、だからといって、それが仏心に励むことに繋がる、とは私には思えない。如何でも良いが、本当に不思議な価値観だ。 *「なむ」は強調の係助詞と説明されるが、此处では何のために「悔しきこと」だと強調しているのかと言えば、「御罪軽むべからむ功德のことをかならずせさせたまへ」るべく説得しているからだ。だから、「なむありける」はくなのでしたから>と言い換えて置く。

など、言ひ続くれど(などと物の怪は言い続けるが)、もののけに向かひて物語したまはむも(殿は物の怪に向かってお話しなさるのも)、かたはらいたければ(傍目に変なので)、封じ込めて(法力でそのまま童女に封じ込めて)、上をば、また異方に、忍びて渡したてまつりたまふ(紫の上を別の部屋に静かにお移し申し上げなさいませう)。

[第三段 紫の上、死去の噂流れる]

かく亡せたまひにけりといふこと(こうして源氏殿の奥方がお亡くなりになったという噂が)、世の中に満ちて(世間に広がって)、御弔らひに聞こえたまふ人びとあるを(ご弔問にお見えになる人たちがいるのを)、いとゆゆしく思す(殿は大変忌まわしくお思いになります)。

*今日の帰さ見に出でたまひける上達部など(賀茂祭翌日の齋王帰院行列を見にお出掛けなされた高官たちなども)、帰りたまふ道に(その帰り道に)、かく人の申せば(この不幸を従者が伝え申すと)、 *「今日の帰さ見に」は注に<賀茂祭の翌日の上賀茂の神館に一泊した齋王の紫野に帰る行列を見るために、の意。>とある。葵祭りは勅祭だったということで、行事次第の詳しい記録が残っているのだろう。大辞泉には「帰さ(かへさ)」の項に<帰ること。特に、賀茂の祭りの翌日、齋王(いつきのみこ)が紫野の齋院に帰ること。>とまで記されている。

「いといみじきことにもあるかな(それは大変なことだな)。生けるかひありつる幸ひ人の(生きた甲斐のあった幸福な人が)、光失ふ日にて(光を失う日ということで)、雨はそほ降るなりけり(雨もそほ降るようだ)」

と、うちつけ言したまふ人もあり(と場当たりの軽口を仰ったりする人もいます)。また(その他にも)、

「*かく足らひぬる人は(あのように恵まれた人は)、かならずえ長からぬことなり(どうしても短命なものです)。 *「かく足らひぬる人は」という言い方について、注には<以下「御おぼえを」まで、上達部の詞。前に「いとかく具しぬる人は世に久しからぬ例もあるを」(第六章二段)「取り集め足らひたることはまことにたぐひあらじ」(同)とあった。盈虚思想である。「絵合」巻末の源氏の嵯峨野の御堂建立もそうした思想に基づく造営であった。>とある。面白い指摘なので少し考える。「盈虚思想(えいきょしろう)」はプラマイゼロのゼロサム世界観らしい。是は何処か因果応報律にも似ていて、自分の人生は帳尻があっているか、みたいな事はよく言う、気はする。が、その帳尻の費用項目には「儲け」も設定されているのであって、プラマイゼロの収支は損が無いのではなく、儲けがある事が前提で、その儲けが努力に見合うのか、納得できるのか、という意味だ。時間軸で人生を見れば、ゼロサムを考えること自体が意味が無い。ゼロサムはあくまで平面で見た社会の凸凹が相殺される位置の経済規模を示す。その社会経済に関与して生き延びる為に消費すべき財を得ている個人だが、各自の収支が努力に見合うかどうか、たとえば、厳密な話ではなく思い付きの類だが、「楽」というものには絶対的定義は無く、「苦」が無い、という相対的定義しかない気がする。が、「快」には絶対価値がありそうだ。ところで、価値の創造、と人が信じるもの、が無ければ、市場の貨幣総額は一定で誰かが得た分だけ他の人が損をする、みたいな話があるが、価値の創造が有る、または見込める、と思えないなら、市場には初めから金は集まらないし、当然その移動もないし、相場は成立しない。ゼロサムはある時点での市場規模を計算する際の重複勘定を避ける注意点に過ぎない。その規模を管理する者にとっては重要な数字でも、市場の原義を説明するものではない。市場には売買がなく、損得は決算をした出資者の個別勘定にしか無い。その個別責任を納得して金融市場に出資参加する者に対する市場の誠実さは、各証券発行個別事業の内容が出資者に分かり易く提示されていることにあるのであって、市場規模自体の拡大を当て込んで事業毎の発損率を分散させた複合証券の商品化を許す、という出資者の各事業に対する見込み判断をありもしない絶対保障を信じ込ませる詐欺で不能状態にして、将来性のある事業に投資を促す市場の機能を破壊する不誠実さは社会を腐らせる。これは組織運営に支障のある犯罪行為というよりは、戦争や核管理と同様に組織の存亡に関わる政策であって、それを管理する国家責任者が凡暗では組織は内部崩壊して、国力も構成員も失いやがては消滅する。いや、しかし、身分の固定化を図ろうとする管理者にとっては、それでもゼロサム世界観は尤もらしい方便かも知れない。

『*何を桜に(桜は散ってこそ美しい)』といふ古言もあるは(という古歌もあることだし)。かかる人の(あの恵まれた奥方が)、いとど世にながらへて(もっと長生きして)、世の楽しみを尽くさば(この世の楽しみを独り占めしてしまったら)、かたはらの人苦しからむ(他の人の迷惑になるということもあります)。 *「何を桜に」は注に<明融臨模本、合点と付箋「までといふにちらてしとまる物ならばなにを桜に思まさまし」(古今集春下、七〇、読人しらず)がある。『源氏積』が初指摘。>とある。「古言もあるは」という語り口なのだから、引歌の参照はどうしても必要な所で、この指摘は必脚だ。で、この引歌だが、例によって「古今和歌集の部屋」サイトに当該ページを当たると、「題しらず」で詞書が無く、「読人しらず」だから周辺事情も分からない。で、歌の文句だけからその意図を探るしかないが、それでも、この歌には花見の気分があって、見事な桜なので散るのが惜しい、という歌か話題が先にその宴席にあって上での、桜は散るからこそ美しい、

と詠んだもの、のように思える。桜は春の女たる紫の上を示してもいるので、女を桜に例えれば、男たるもの散らさでどうする、みたいな言い方にも聞こえる。なので、あまり、後に咲く藤の出番が無い、みたいな歌意は感じないが、此处でこの歌を引用する歌の解釈は下の文意からすると、傍迷惑、と取っているらしい。が、この引歌指摘が正しいなら、「傍迷惑」は歌意の一意とは言えず、そこから連想される散り花の多面性の一つにく過ぎたるは及ばざるが如し>があり、それを世の平穩に結び付けた言い方が<傍迷惑>だと思うので、この文は校訂にある通り、「古言もあるは」で句点を打って、上文の「かならずえ長からぬことなり」を倒置で受けた言い方と見るべきなのだろう。しかし、倒置の効果は引歌の拡大解釈を下文に波及させる意図があつて、その拡大歌意を「かたはらの人苦しからむ」の説明にもしている、という語り口に見える。

今こそ(これでやっど)、*二品の宮は(にほんのみやは、二品という厚遇を帝から賜わりなされた六条院の嫁宮は)、もとの御おぼえ現はれたまはめ(それに相応しい御待遇を見なさる事だろう)。いとほしげに圧されたりつる御おぼえを(不当にも引けを取っていた御待遇だったので) *「二品」については、朱雀院が三の宮の立場を憂慮して帝に宮への俸禄加増を促したことで、「二品になりたまひて、御封などまさる。いよいよはなやかに御勢ひ添ふ。」と三章一段にあつた。これによって、いよいよ宮と紫の上との身分の違いがはっきりして、上は立場が無くなった。この公的な身分の差は、源氏殿の胸一つで収められる内輪話などではなかった。

など、うちささめきけり(などとひそひそ話をしている者が居ました)。

衛門督(衛門督の藤君は)、昨日暮らしがたかりしを思ひて(昨日の折角の葵祭りに出掛けずに暗い気分でも過ごしたことを思って)、今日は、御弟ども、左大弁、藤宰相など(今日は弟君の左大弁や参議などと同車して)、奥の方に*乗せて見たまひけり(奥の席にお乗りになって斎王行列を見物なさいます)。 *「乗せて」は「乗す」の連用形に、その事象に次いで別の事象に続ける語法の接続助詞「て」がついたもの、である筈だ。「乗す」は、動詞「乗る」の未然形に助動詞「す」が付いた「乗らす」のラ抜き言葉だとして、問題は「す」の意味だ。現代語では、この語は使役の<させる>の意の用法になるが、古語では<尊敬語>とも用いられて、尊敬の意を表わす。>(古語辞典)場合もあると説明されていて、此处でも「見たまひけり」とあり、この「たまふ」は同一人物の描写で「乗す」にも及ぶので、この「す」は尊敬の補助用法なのだろう。で、「おくのかたに」という言い方は、他の同乗者がいて、話題の主は<奥の席に>という意味なのだろうから、他の同乗者が「おんおとうとども」だと知れる、ということのようで、当時の読者は「見たまひけり」までを一気に読んで文意が掴めたのだろうが、理屈で読めば、文末から意味が既定される、という難文だ。

かく言ひあへるを聞くにも(その見物の街中で人びとが、六条院の奥方の不幸を噂し合っているのを聞いては)、胸うちつぶれて(その不吉さに胸が押し潰されて)、

「*何か憂き世に久しかるべき(こんな憂き世に長生きして何になる)」 *注には<明融臨模本、合点と付箋「のこりなくちるそめてたきさくら花有てよのなかはてのうければ」(古今集春下、七一、読人しらず)とある。『源氏積』が初指摘。ただし初句「なごりなく」とある。文句が合わない。現行の注釈書では「散ればこそいとど桜はめでたけれ憂き世に何か久しかるべき」(伊勢物語)を指摘。>とある。古今集の歌は漢字を当てると「残り無く 散るぞ目出度き 桜花 在りて世の中 果ての憂ければ」という句らしい。初句が「残り無く」だろうと「名残り無く」だろうと、「何か憂き世に久しかるべき」に符合する詠み方はしていない。同じような歌意の参照歌という指摘ならともかくも、詠み方が違う歌が引用元である筈がない。こういうものは、初めから補説とすべきで、「現

行の注釈書では「伊勢物語の歌が引用元とされていて、その文句が符合するのだから、こちらが必脚だ。伊勢物語の歌は八十二段の話に出てくる歌らしい。八十二段は、淀川沿いに摂津に下った渚の院という所へ親王が側近を従えて狩に出掛けた時の桜の花見に興じた話とのことで、話の中身の解説やその他の主旨でも多くの関連サイトがあって、特に史跡めぐりの紀行風ページが楽しい。で、伊勢物語八十二段本文にある「かたののなぎさの家そのみんのさくら殊におもしろし」の「かたの」は今の大阪府交野市のことではなく、枚方市あたりのこと、だったらしい。というか、山崎の先の水無瀬(みなせ)にあったという親王の別荘(御屋=宮)の淀川北岸から見て、南岸の渚(なぎさ)は向こう方であり、その平らな野原を「かたの」と言った、ような気がする。で、枚方市教育委員会が「渚の院跡」に比定した場所に掲げた案内板に、その花見での従者として仕えた在原業平が詠んだ歌として「世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」を取り上げて、立太子争いに敗れて失意にある親王の「のどけ」くならぬ>心境を思い遣った歌、と解説されている、とのサイト記事があった。この指摘は肯けるもので、「絶えて無かりせば」は<初めから無かったなら>だから、「殊におもしろし」とあった見事な院の桜が散ることを思えば<「のどけ」くならぬ>のだが、初めから咲かなければ散る心配も無い、という言い方で権勢の無常を示すことで、むしろ立太子から外れた方が気楽だと親王を慰めた、ということなのだろう。是に続く親王を慰める同調歌が、この引用元の句だ。だから、「散ればこそいと桜はめでたけれ(散るからこそ桜は美しい)」の「桜」は、業平が詠んだ<権勢の華やぎ>ではなく、立太子に失敗した<親王自身>を指していて、「憂き世に何か久しかるべき(醜態を曝して永らえても良いことは無い)」は<煩わしい政務に追われても詰まらない>という意味なのだろう。引用句は藤君自身の気持ではあるだろうが、是を引用した心象背景には、六条院の奥方が桜に準えられる華やかさで、引歌の表意通りの散り際の良さを藤君が感じている、かのような言い方で紫の上の存在感を漂わそうとする作者の意図もありそうだ。

と(と藤君は)、うち誦じ(うちじゅうじ、古歌の詠唱を)独りごちて(独り吟じて)、かの院へ皆参りたまふ(二条院へ皆で参上なさいます)。たしかならぬことなればゆゆしくや、とて(まだ確かではないことなので弔問の体では具合が悪いこともあるかと)、ただおほかたの御訪らひに参りたまへるに(ただ普通の病氣見舞いということで参上なされたのだが)、かく人の泣き騒げば、まことなりけりと、立ち騒ぎたまへり(このように家人が泣き騒いでいるので不幸は本当なのだと藤原御兄弟は動揺なさいました)。

式部卿宮も渡りたまひて(紫の上の実父の式部卿宮もお越しなさって)、いといたく思しほれたるさまにてぞ入りたまふ(それはとても落胆した様子で邸内にお入りになります)。*人の御消息も(宮はその御来意さえ)、え申し伝へたまはず(弔問だとは、とても申し伝え為されません)。*「人」は訳文では<一般の弔問客>と解しているようだが、「御消息」の修辞であり、「伝へたまはず」の敬語遣いからして、この文の主語は式部卿宮かと思う。で、「人」は上文を受けた<その話題の人>という言い方で、「人の御消息」は<その人の御来意>のことで、「申し伝へ」はその来意をはっきりと弔問だとは家人に告げ難いものの、騒がしい邸内の様子に動揺して、平然と見舞いだとも言い出せない、という玄関先の描写と読んで置く。

大将の君(そうこうしている玄関先へ大将の源君が)、涙を拭ひて立ち出でたまへるに(涙を拭って出ていらしたので)、

「いかに、いかに(どうなんですか)。ゆゆしきさまに人の申しつれば、信じがたきことにてなむ(不幸があったように皆が言っていたが、信じられないことなので)、ただ久しき御悩みをうけたまはり嘆きて参りつる(ただ長患いのお見舞いをと参上したのです)」

など*のたまふ(などと藤君は仰います)。 *「のたまふ」は式部卿宮の言葉のようにも見えるが、玄関先で遠慮なく話し合える関係性からして、注にある藤君の言葉という指摘に従う。

「いと重くなりて、月日経たまへるを(上は病態がとても悪化して月日を送っていらして)、この暁より絶え入りたまへりつるを(今朝方お亡くなりになったのだが)、もののけのしたるになむありける(それは物の怪の仕業だったようなのです)。やうやう生き出でたまふやうに聞きなしはべりて(だんだん息を吹き返しなされたようにお聞き致しまして)、今なむ皆人心静むめれど(今のところは家人は皆安心しているようですが)、まだいと頼もしげなしや(まだとても頼りなく思われます)。心苦しきことにこそ(心配なことです)」

とて(と言って源君は)、まことにいたく泣きたまへるけしきなり(本当にとっても泣いていらっしやるようなのです)。目もすこし腫れたり(目も少し腫れていました)。

衛門督(藤君は)、わがあやしき心ならひにや(自分が不倫を働いた邪まな男の本性に準えてか)、『この君の(この源君が)、いとさしも親しからぬ継母の御ことを(何もそれほど親しくも無い継母のご容体を)、いたく心しめたまへるかな(ずいぶん親身に思いなされるものだ)』、と目をとどむ(と源君の奥方への恋情を疑って気に止めます)。

かく、これかれ参りたまへるよし聞こし召して(このように目ぼしい方々がお見舞いに参上なさった事を殿は従者からお聞きあそばして)、

「重き病者の(おもきびやうじゃの、重病人が)、にはかにとぢめつるさまなりつるを(急に最期を迎えたようになったのを)、女房などは心もえ収めず(女房などは慌てて)、乱りがはしく騒ぎはべりけるに(取り乱して騒ぎ立てたので)、みづからもえのどめず(私も冷静ではいられず)、心あわたたしきほどにてなむ(動揺しております)。ことさらになむ(また改めて)、かくものしたまへるよろこびは聞こゆべき(こうして御見舞い頂いた御礼は申し上げます)」

とのたまへり(とご挨拶の伝言を仰いました)。督の君は胸つぶれて(藤君はその伝言の御挨拶にも源氏殿の存在を感じて、胸が締め付けられ)、かかる折の*らうらうならずはえ参るまじく(こうした時の非常時で無ければとても源氏殿の所へ参上できたものではないというように)、けはひ恥づかしく思ふも(漠然と気が引けて思えるのも)、心のうちぞ腹ぎたなかりける(内心は密通を隠し通そうという腹汚なさなのでした)。 *「らうらうならず」は辞書に項目が無い語だ。で、「らうらうじくあらず」の慣用法なのだろうと見当を付ける。「らうらうじ」は<かわいらしい。美しい。>の他に<物なれてい。>と古語辞典にある。「物慣れている」が<手馴れている=日常業務>のことだとすれば、「らうらうならず」は<日常業務ではない=非常時>ということになる。

[第四段 紫の上、蘇生後に五戒を受く]

かく生き出でたまひての後しも(このように上が生き返りなされた後というものは)、恐ろしく思して(殿は物の怪の憑依を恐ろしくお思いになって)、またまた(さらにさらに)、いみじき法どもを尽くして加へ行なはせたまふ(厳しい修法の限りを尽くし加えて延命の祈祷を上げさせなさいます)。

うつし人にてだに(生前でさえ)、むくつけかりし人の御けはひの(気味が悪かった御息所の怨霊が)、まして世変はり(まして死後に)、妖しきもののさまになりたまへらむを思しやるに(妖しいものに姿を変えていらっしやることを思ってみれば)、いと心憂ければ(殿はととても嫌気が差して)、中宮を扱ひきこえたまふさへぞ(御息所の娘の秋好中宮に関わり申し上げなさることさえも)、この折はもの憂く(この時は気が進まず)、言ひもてゆけば(言ってみれば)、女の身は(女というものは)、皆同じ罪深き*もとみぞかしと(皆同様に怨みを根に持つ罪深い生来の性質があるものなのだ)、なべての*世の中厭はしく(およそ男女関係というものが疎ましく)、かの、また人も聞かざりし御仲の睦物語に(あの他の人が聞くはずもない上との睦言に)、すこし語り出でたまへりしことを言ひ出でたりしに(殿が少し話し出しなされた事を物の怪が恨めしげに言い出したことに)、まことと思し出づるに(本当に女は執念深いと思ひ出されて)、いとわづらはしく思さる(とても面倒なことにお思いなさいます)。 *「もとみ」は「基」で<根本=生来の性質>と読んで置く。 *「世の中」は<特に男女関係をさす。>と注にある。

御髪下ろしてむと切に思したれば(上が御髪を下して出家したいと切にお思いになったので)、忌むことのもやとて(帰依すれば魔除けの力も強まるかと)、御頂しるしばかり挟みて(上の頭に形ばかりハサミを入れて)、*五戒ばかり受けさせたまつりたまふ(在家信者の五戒の行だけを殿は上に受けさせ申し上げなさいます)。 *「五戒(ごかい)」は注に<殺生・偷盗・邪淫・妄語・飲酒の戒律。在家の信者の守るべき戒律。>とある。

*御戒の師(五戒の行を取り仕切る僧が)、忌むことのすぐれたるよし(戒めを良く守る誓いを)、仏に申すにも(仏に申す時にも)、あはれに尊きこと混じりて(厳粛な中にも感慨深く改まった気持が混じって)、人悪く御かたはらに添ひゐて(殿は体面も無く上の横に添って座って)、涙おし拭ひたまひつつ(涙を押し拭いなさいつつ)、仏を諸心に念じきこえたまふさま(ご加護を上と共に念じ上げ為さる様子は)、世にかしこくおはする人も(世に畏くも尊敬されなさる人でも)、いとかく御心惑ふことにあたりては(これほどに御心配なことに当たっては)、え静めたまはぬわざなりけり(とても静かに構えていらっしやれないものようです)。 *「御戒の師」は「ごかいのし」と読みがある。戒行を取り仕切る高僧なのだろう。

いかなるわざをして、これを救ひかけとどめたてまつらむとのみ(どういう方法でこの方を救い付けてこの世に留め申し上げようかとばかり)、夜昼思し嘆くに(殿は夜昼思い嘆きなさるので)、ほれぼれしきまで(呆然とまでなつて)、御顔もすこし面瘦せたまひにたり(御顔も少し面瘦せなさいました)。

[第五段 紫の上、小康を得る]

五月などは(ごぐわちなどは)、まして(絶命騒ぎのあった四月にまして)、晴れ晴れしからぬ空のけしきに(晴れ晴れしくない空模様)、えさはやぎたまはねど(上はさわやかな気分にお成りにはならないが)、ありしよりはすこし良ろしきさまなり(騒ぎの時よりは少し良くなった様子です)。されど、なほ絶えず悩みわたりたまふ(それでも相変わらず体調を崩しなさいました)。

もののけの罪救ふべきわざ(物の怪の障りから上を救うべき写経を)、*日ごとに法華經一部づつ供養せさせたまふ(毎日法華經の經典一卷づつを供養にさせなさいます)。日ごとに何くれと尊きわざせさせたまふ(また、毎日何かと高価な供物を供えさせなさいます)。御枕上近くても(上の御枕近くに於いても)、不断の御読経、声尊き限りして読ませたまふ(絶え間ない御読経を声の良い僧ばかりに命じて読ませなさいます)。現はれそめては(姿を現してからは)、折々悲しげなることどもを言へど(時々弱音を吐くものの)、さらにこのもののけ去り果てず(一向にこの物の怪は消え去りません)。*「日ごとに法華經一部づつ供養せさせたまふ」は注に<『法華經』二十八品を毎日一部(一品)づつを写経させて、六条御息所の成仏のため供養させること。>とある。

いとど暑きほどは、息も絶えつつ、いよいよのみ弱りたまへば、いはむかたなく思し嘆きたり(とても暑い日は上は息も絶え絶えにいよいよと弱りなさるので、殿は言いようも無く悲嘆に暮れなさいます)。

なきやうなる御心地にも(上は失くし掛ける御意識の中にも)、かかる御けしきを心苦しく見たてまつりたまひて(殿のこうした御様子を心苦しく思い申し上げなさって)、

「世の中に亡くなりなむも(私がこの世から居なくなるとしても)、わが身にはさらに口惜しきこと残るまじけれど(自分では少しも心残りはないが)、かく思し惑ふめるに(このように殿が思い悩んでいらっしゃるようなのに)、*空しく見なされたてまつらむが(その甲斐も無い姿に見做され申し上げるのが)、いと*思ひ隈なかるべければ(とても浅ましいので)」、*「空しく見なされたてまつらむが」は注に<「れ」受身の助動詞。源氏から見られる、の意。『集成』は「はかなくなった自分の姿をお目にかけるのは」。『完訳』は「むなしく命の果てる姿をお目にかけてしまうことになっては」と訳す。>とある。とても分かり難い言い回しだ。*「おもひくまなし」は<思いが隅々まで至らない>という意味らしい。

思ひ起こして(気を取り直して)、御湯などいささか参るけにや(御薬湯などを少し召し上がった所為か)、六月になりてぞ(六月になってから)、時々御頭もたげたまひける(時々頭を枕からお上げなさるようになりました)。めづらしく見たてまつりたまふにも(殿は喜ばしく思い申し上げなさりながらも)、なほ、いとゆゆしくて(やはりとても心配で)、六条の院にはあからさまにもえ渡りたまはず(六条の院には僅かほどもお出向きなさいません)。「思ひ起こして」から地の文に戻る、という渋谷校訂だ。「と」などの引用句を受ける格助詞の無い紛らわしい文で、それだけ紫に上の気持ちに添った語り口なのかと、言い換え文も「と」などを補語しないで置く。これで作者の意図が表現できているのかどうか心許ないが、敬語遣いや文の内容から見て校訂の妥当性には説得力がある。